

## 宗務総長挨拶

宗務総長

増田修誠

慈光照護のもと、御寺院住職様におかれましては益々ご法耕にお励みのことと拝察申し上げます。

この度の宗務総長任期満了にともなう選挙に際しまして、皆様より温かい励ましのお言葉・ご支援を賜りまして、宗務総長の職に就任させていただきました。これはひとえに、皆様のご信頼の賜物と心より深く感謝と御礼を申し上げます。

二〇二三年五月にお迎えする特別法要『開山親鸞聖人御誕生八百五十年奉讃法会・立教開宗八百年・中興真慧上人五百年忌・聖徳太子千四百年忌』。この二度とないご勝縁に向けて、お一人でも多くの檀信徒、ご家族の皆様と共に一念仏を称する感謝の法会を目指し、『親鸞聖人の教えに出遇

う宝物館』建設事業の円成に向け、皆様には一層のご支援・ご協力を賜りますよう謹んでお願い申し上げます。

終わらないコロナ禍をはじめ混迷を深める現代社会、人が真に人として生きることが困難となる時代に、宗門の現況も様々な面において危急存亡の色を深めているように思えてなりません。何百年も大切に受け継がれ、地域に寄り添い「人と人とのつながり」を築いて下さった先達の思い・願いを、しっかりと受け止め、時代の変化に対応する宗務の新たな歩みを図らなければならないと考えます。

高田本山専修寺の法灯を絶やすことなく新たな時代に即した更なる宗政の発展を目指し、微力ながら全力を尽くす覚悟でございます。

重ねて御寺院住職の皆様、お同行の皆様のご理解とご協力を賜りますよう切にお願い申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。

合 掌

宗 達

宗 達 第一一七四号

法主殿来る令和四年十月三日真宗高田派専修寺北海道別院報恩講・特別法要お待ち受け法会に御親修御親教相成る

令和四年七月一日

法主鈴印

宗務総長 大僧都 増 田 修 誠

宗 達 第一一七五号

法嗣殿来る令和四年十月三日真宗高田派専修寺北海道別院報恩講・特別法要お待ち受け法会に御親修相成る  
令和四年七月一日

法主鈴印

宗務総長 大僧都 増 田 修 誠

宗 達 第一一七六号

法主殿来る令和四年九月二十三日讚佛会に御親教相成る  
令和四年七月六日

法主鈴印

宗務総長 大僧都 増 田 修 誠

宗 告

宗 告 第 一 一 三 六 号

来る令和四年九月二十日より同二十六日まで讚佛会執行相成る  
令和四年七月六日

宗務総長  
大僧都 増  
中僧都 藤  
律 師 弓  
田 谷 削  
修 知 弘  
誠 良 胤

宗 告 第 一 一 三 七 号

来る令和四年十月一日より同三日まで資堂講法会執行相成る  
令和四年七月六日

宗務総長  
大僧都 増  
中僧都 藤  
律 師 弓  
田 谷 削  
修 知 弘  
誠 良 胤

宗 告 第 一 一 三 八 号

来る令和四年十一月三日より同四日まで納骨堂法会執行相成る

一、日 時 三日、四日

納骨堂 午前十時三十分

御影堂 午前十一時（洪鐘撞止）

一、参 勤 者 一般寺院

一、衣 体 色衣、紋章五条袈裟、差袴着用

令和四年七月六日

宗務総長

総 務

大僧都

中 僧 師

律 師

大僧都

中 僧 師

律 師

大僧都

中 僧 師

律 師

大僧都

中 僧 師

律 師

大僧都

中 僧 師

律 師

増

藤

弓

増

藤

弓

増

藤

弓

増

藤

弓

増

藤

田

谷

削

田

谷

削

田

谷

削

田

谷

削

田

谷

修

知

弘

修

知

弘

修

知

弘

修

知

弘

修

知

誠

良

胤

誠

良

胤

誠

良

胤

誠

良

胤

誠

良

令和四年七月六日

宗 告 第 一 一 三 九 号

来る令和四年十一月五日より同十日まで秋法会執行相成る

一、新加入法会 五日、六日、七日

一、参 勤 者 一般寺院

一、衣 体 色衣、紋章五条袈裟、差袴着用

令和四年七月六日

宗務総長

総 務

大僧都

中 僧 師

律 師

増

藤

弓

田

谷

削

修

知

弘

誠

良

胤

任 免

令和四年五月八日

依請解其職

福井別院評議員

加藤 智性

依請解其職

福井別院総代

佐々木俊英

福井別院評議員を命ずる

勝林寺住職

武田 純真

福井別院総代を命ずる

正行寺住職

佐々木照信

依請解其職

真宗高田派総務

真宗高田派責任役員

専修寺執事

専修寺責任役員

中僧都

藤谷 知良

依請解其職

真宗高田派総務

真宗高田派責任役員

専修寺執事

専修寺責任役員

律師

弓削 弘胤

任 真宗高田派宗務総長

専誠寺住職

大僧都

増田 修誠

依請解其職

真宗高田派宗務総長

真宗高田派代表役員

専修寺執事

専修寺代表役員

大僧都

増田 修誠

任 真宗高田派宗務総

信福寺住職

中僧都

藤谷 知良

真宗高田派宗務総長

増田 修誠

任 真宗高田派代表役員

専修寺執事

専修寺代表役員

任 真宗高田派責任役員

專修寺執事

專修寺責任役員

真宗高田派總務

藤谷 知良

令和四年六月十三日  
三重県龜山市西町

誓昌院住職

梅林 正温

任 真宗高田派務總

隨念寺住職

律 師

弓削 弘胤

三重県龜山市和田町  
補 幸福寺住職代務者

任 真宗高田派責任役員

專修寺執事

專修寺責任役員

真宗高田派總務

弓削 弘胤

令和四年七月二十七日

得 度

副住職拜命

令和四年七月二十六日

三重県津市久居元町

西林寺衆徒

佐藤 有朋

三重県鈴鹿市三日市

泰然院 慈朋 院家首席二等

撰取院衆徒

清水 智英

任 西林寺副住職

東京都目黒区八雲

至徳院 龍彦 院家二等

林柔寺衆徒

長 龍彦

三重県鈴鹿市木田町

慈光院 秦惶 老分一等

光明寺衆徒 磐城 秦惶

列 令和四年七月一日  
其身一代堂班

中老一等

老分二等、老分一等

院家二等、院家一等

院家首席二等

西生寺衆徒

橋本 康壽

三重県鈴鹿市木田町

佛光院 瞭真 老分一等  
光明寺衆徒 磐城 瞭真

三重県津市大里窪田町

春雲院 蓮祐 中老一等

常樂寺衆徒 坂 祐介

列 令和四年七月六日  
其身一代堂班

院家首席一等  
准上座格三等

西林寺衆徒

佐藤 有朋

身分堂班

令和四年五月十九日

列 其身一代堂班 老分一等

院家二等、院家一等

院家首席二等、院家首席一等

准上座格三等

蓮性寺衆徒 實義 徳真

七月御影堂常在説教（晨朝）

七・一 権少僧都 真置 信海

七・二 権中僧都 田中 明誠

七・三 権中僧都 田中 明誠

七・四 権中僧都 里榮 秀教

七・五 権中僧都 中村 宜成

布教任命



七・二六	權大僧都	浦井 宗司	八・八	大律師	高島 光憲
七・二五	中僧都	佐藤 弘道	八・六	權中僧都	岡 知道
七・二四	權大僧都	戸田 栄信	八・五	權中僧都	藤田 正知
七・二三	律師	田中 唯聰	八・四	少僧都	岡 知道
七・二二	權中僧都	生桑 崇等	八・三	律師	隆 妙灑
七・二一	少僧都	上田 英典	八・二	權中僧都	中村 宜成
七・二〇	少僧都	青木 妙法	八・一	權中僧都	里榮 秀教
七・一九	少僧都	山中 真諭	八月御影堂常在説教(晨朝)		
七・一八	權少僧都	真置 信海			
七・一七	中僧都	戸田 恵信	七・一六	權少僧都	高藤 英光
七・一六	大僧都	上田 隆順	七・一五	權少僧都	高藤 英光
七・一五	律師	北畠 心淳	七・一〇	大律師	北畠 大道
七・一四	律師	隆 妙灑	七・九	大律師	北畠 大道
七・一三	權中僧都	中村 宜成	七・八	律師	水谷 忍英
七・一二	權中僧都	鷲山 了悟	七・七	權中僧都	藤浦 弘導
七・一一	中僧都	青木 義成	七月御影堂常在説教(逮夜・日中)		
七・一〇	大律師	高島 光憲	七・三一	權少僧都	真置 信海
七・八	律師	若林 妙百	七・三〇	中僧都	青木 義成
七・七	權中僧都	藤田 正知	七・二九	權中僧都	安藤 章仁
七・六	少僧都	山中 真諭	七・二八	少僧都	岡 知道

八月御影堂常在説教（逮夜・日中）

八・九	權中僧都	生桑	崇等
八・一〇	權中僧都	村上	英俊
八・一一	大僧都	上田	隆順
八・一二	律師	隆	妙灑
八・一三	少僧都	青木	妙法
八・一七	中僧都	青木	義成
八・一八	律師	北畠	心淳
八・一九	大律師	久世	宜範
八・二〇	大律師	北畠	大道
八・二一	權少僧都	真置	信海
八・二二	中僧都	青木	義成
八・二三	權中僧都	中村	宣成
八・二四	少僧都	藤澤	真樹
八・二五	權中僧都	安藤	章仁
八・二六	權大僧都	浦井	宗司
八・二七	律師	田中	唯聽
八・二八	權中僧都	田中	明誠
八・二九	少僧都	上田	英典
八・三〇	權大僧都	戸田	栄信
八・三一	權少僧都	真置	信海

八・七	逮夜	大律師	高島	光憲
八・八	日中	律師	水谷	忍英
八・九	逮夜	權少僧都	高藤	英光
八・一〇	日中	權中僧都	藤浦	弘導
歡喜會説教				
八・一四	晨朝	權中僧都	鷲山	了悟
八・一五	日中	大僧都	増田	修誠
八・一五	晨朝	律師	若林	妙百
八・一六	日中	中僧都	藤谷	知良
八・一六	晨朝	律師	隆	妙灑
八・一六	日中	律師	弓削	弘胤
高田慈光院 月例法会				
七・一〇、一六、二六		權大僧都	浦井	宗司
八・一〇、二六		權少僧都	高藤	英光
報徳園 月例法会				
七・一五		權少僧都	高藤	英光

敬 弔

次の方々が御往生なさいました。謹んで敬弔の意を表します。

令和四年

六・七

愛知県田原市加治町石井戸

浄光寺坊守

黒田 麗子

七・十九

三重県津市乙部

上宮寺住職

清水谷博祇

六・二十七

福井県坂井市三国町北本町

法圓寺住職

修多羅道春

贈 権少僧正

贈 権中僧都

七・七

三重県津市小舟

安楽寺住職

吉田 教誠

贈 権大僧都

七・十二

三重県津市森町

見立寺住職

高嶋 真秀

贈 中僧都



平等院殿葬儀御香儀芳名

平等院殿の葬儀に際しましては、高田派御寺院より鄭重なる御弔慰並びに芳志を賜り有難く厚く御礼申し上げます。お蔭を以ちまして諸法事万端滞りなく相営み、先日、御廟にて御納骨式を厳修させていただきました。ここに御香儀芳名を記し謝意を表します。

なお、御同行・一般の方々よりも御芳志を賜りましたが、宗報への掲載は割愛させていただきました。何卒ご了承くださいますようお願い申し上げます。

本寺 本寺専修寺 本寺専修寺 役員  
 別院 京都別院 輪番  
 名古屋別院 名古屋別院 輪番  
 神戸別院 神戸別院 輪番

北海道別院 輪番 仏教婦人会

福井別院 福井別院 輪番

関東別院 関東別院

横浜別院乗願寺 横浜別院乗願寺

兼帯所

如來寺 輪番

三重県第一組西部

智慧光院 智慧光院 衆徒 坊守

玉保院 玉保院

慈智院 衆徒

厚源寺 厚源寺

三重県第一組東部

成願寺 住職 坊守

勝樂寺 住職 坊守

浄泉寺 浄泉寺

明覚寺 明覚寺

慈光寺 住職 坊守

三重県第二組甲部東

東海寺 東海寺

信行寺 信行寺

宗門のお知らせ

善行寺	善行寺	深正寺	深正寺	住職	檀信徒一同	婦人会
満願寺	満願寺	善徳寺	心覚寺	住職	婦人会	
三重県第二組甲部西	浄光寺	心覚寺	心覚寺	住職		
浄光寺	浄光寺	報恩寺	報恩寺	坊守		
重願寺	住職	彰見寺	彰見寺	住職	坊守	
隨宏寺	同行一同	上宮寺	上宮寺	坊守	若坊守	
妙教寺	同行一同	三重県第四組				
啓運寺	住職	善休寺	善休寺	住職		
浄泉寺	同行一同	慈相寺	衆徒	衆徒		
三重県第二組乙部		三重県第五組				
願正寺	住職	光徳寺	住職	住職	同行	
真楽寺	住職	仲安寺	仲安寺	同行		
三重県第三組		圓照寺	圓照寺	住職	坊守	
延命寺	住職	西方寺	住職	住職	同行	
浄誓寺	衆徒	三重県第六組北部				
金剛寺	同行一同	本楽寺	住職	住職	坊守	同行
本徳寺	本徳寺	唯称寺	住職	住職	坊守	同行
光澤寺	住職	三重県第六組東部				
潮音寺	同行一同	明照寺	住職	住職		
教圓寺	同行一同	法性寺	住職	住職	副住職	

宗門のお知らせ

大誓寺

住職

善福寺

善福寺

坊守

永福寺

住職

三重県第九組東部

三重県第六組西部

照安寺

照安寺

萬徳寺

萬徳寺

普賢寺

住職

西方寺(中川)

住職

衆徒

西生寺

住職

寶積寺

寶積寺

三重県第十組

青巖寺

青巖寺

坊守

前坊守

仏教婦人会

千福寺

千福寺

住職

檀家一同

真性寺

真性寺

浄芳寺

住職

婦人会

義明寺

義明寺

住職

延寿寺

住職

婦人会

田仲寺

衆徒

欣浄寺

住職

婦人会

三重県第八組

三縁寺

三縁寺

住職

常照寺

住職

婦人会

轉輪寺

住職

因誓寺

住職

迎接寺

住職

採蓮寺

採蓮寺

住職

婦人会

長盛寺

住職

同行

善性寺

住職

女性部

明通寺

明通寺

住職

寶田寺

寶田寺

住職

坊守

前坊守

猷忠寺

猷忠寺

住職

婦人会

本照寺

住職

前坊守

三重県第十一組東部

三重県第九組西部

浄泉寺(大仰)

住職

圓浄寺

住職

坊守

女人講

西光寺

西光寺

住職

宗門のお知らせ

柳含寺	衆徒	三重県第十三組	
満昌寺	住職	成覚寺	住職
三重県第十一組西部		浄源寺	浄源寺
西念寺		三重県第十四組	
光福寺		長徳寺	坊守
浄明寺	住職	報国寺	住職
浄福寺	住職	宝林寺	住職
福専寺	住職	恵日寺	住職
延命寺	住職	正法寺	住職
三重県第十二組東部		西林寺	住職
来迎寺	住職	西蓮寺	住職
来岸寺	住職	法光寺	住職
	住職	松原寺	住職
	住職	三重県第十五組	
本光寺	住職	誓正寺	檀信徒
光善寺	住職	浄安寺	浄安寺
明顕寺	住職	誓信寺	誓信寺
佛照寺	住職	真善寺	真善寺
安楽寺	住職	清福寺	清福寺
常楽寺	住職	善性寺	善性寺
松仙寺	住職		

宗門のお知らせ

福泉寺	住職	檀信徒一同	三重県第十七組北部	
誓昌院			深廣寺	深廣寺
永信寺			一乗寺	一乗寺
西徳寺	住職		法雲寺	住職
幸福寺	住職		西岸寺	住職
三重県第十六組南部			正福寺	住職
福萬寺	住職	同行	乘願寺	住職
善照寺	住職	檀信徒会一同	三重県第十七組南部	
青蓮寺			教安寺	住職
来教寺	同行一同		心光寺	住職
西生寺	住職	同行一同	西願寺	坊守
西願寺	住職	檀家一同	西法寺	住職
浄国寺			願正寺	住職
浄福寺	住職	上野女人講	三重県第十八組	
三重県第十六組北部			龍泉寺	同行一同
保智院	住職	同行一同	善教寺	前坊守
海善寺	住職		興正寺	住職 婦人会
光善寺	住職	坊守	興正寺	住職 坊守
安性寺	住職	同行	成満寺	住職 坊守 若坊守
			願誓寺	檀家一同 婦人会
			願誓寺	婦人仏教会一同



宗門のお知らせ

三重県第二十一組東部	立法寺	立法寺	女人講一同	信福寺	信福寺	住職	坊守
	聖洞寺	住職		正行寺	住職		
	中山寺	住職	坊守	法林寺	住職		
			前坊守	真永寺	住職	坊守	若坊守
			仏教婦人会	養元寺	住職	衆徒	坊守
	三重県第十九組甲			三誓寺	住職		
	常信寺	常信寺		宣隆寺	住職	坊守	前坊守
	輪崇寺	輪崇寺			同行		寺族
三重県第十九組乙				正源寺	住職	坊守	
願行寺	願行寺			三重県第二十一組西部			
				光明寺	住職	副住職	同行
三重県第二十組	常超院	住職		光福寺	同行		
	万性寺	万性寺		誓休寺	住職		
	浄福寺	住職	同行	三重県第二十二組西部			
	大蓮寺	坊守	仏教婦人会一同	金光寺	住職		
	顕正寺	住職		正信寺	住職		
	西光寺	住職	坊守	深藕寺	住職		
	欣浄寺	住職	前住職	欣念寺	住職		
	誓元寺	住職	同行中	蓮花寺	住職	同行	
	誓覚寺	住職	衆徒				
			同行				
				三重県第二十二組東部			

宗門のお知らせ

西蓮寺	住職	坊守	西蓮寺	住職	西蓮寺	女人講
台蓮寺	住職		三重県第二十五組南部	唯信寺	唯信寺	
見潮寺	坊守		最勝寺	信光寺	住職	
三重県第二十三組			正法寺	滿流寺	住職	
宗休寺	宗休寺	住職	三重県第二十五組北部	青龍寺	住職	
善昌寺	善昌寺	住職	專照寺	專照寺	住職	
隨願寺	住職		三重県第二十六組	真福寺	真福寺	
正運寺	住職	坊守	井福寺	井福寺	住職	
隨念寺	住職	同行	本覚寺	本覚寺	住職	
西光寺	住職		正圓寺	常念寺	住職	
壽福院	住職		常念寺	願證寺	願證寺	
常超院	住職		眞臺寺	眞臺寺	眞臺寺	
三重県第二十四組甲東			常教寺	常教寺	常教寺	
正念寺	住職		光明寺	光明寺	光明寺	
眞昌寺	坊守					
三重県第二十四組甲西						
要泉寺	住職	衆徒				
三重県第二十四組乙部		婦人会				
成泉寺	成泉寺					
了性寺	住職					

宗門のお知らせ

海念寺	海念寺	坊守	愛知県第二組	善福寺	坊守
常寶寺	常寶寺	坊守	愛知県第三組	万福寺	坊守
三重県第二十七組			幸蓮寺	幸蓮寺	住職
西林寺	西林寺		眞福寺		
光蓮寺	光蓮寺		愛知県第四組		
妙華寺		住職 坊守	榮久寺	榮久寺	
浄徳寺		住職	蓮教寺	蓮教寺	
西向寺		住職	明德寺	明德寺	
三重県第二十八組			宗延寺	宗延寺	
光明寺		住職 衆徒	本泉寺	本泉寺	
正蓮寺	正蓮寺		愛知県第五組		
光泉寺		住職	満性寺	住職 坊守	
栄松寺		住職 同行 婦人会	聖洞寺	住職 坊守	
本念寺		住職	浄泉寺	浄泉寺 坊守	前住職 坊守
直轄			愛知県第七組		
大仙寺	大仙寺	住職	聖眼寺	聖眼寺 住職	
欣浄寺			正太寺	住職	
愛知県第一組			願成寺	願成寺	
愛知一組一同					
正信寺	正信寺	前住職 坊守			

宗門のお知らせ

愛知県第八組

西光寺

住職

坊守

前坊守

同行

壽林寺

壽林寺

林誓寺

林誓寺

常國寺

常國寺

正福寺

正福寺

澄泉寺

澄泉寺

永福寺

永福寺

南松寺

南松寺

林柔寺

林柔寺

願壽寺

願壽寺

唯念寺

唯念寺

覺音寺

覺音寺

本行寺

本行寺

願信寺

願信寺

稱念寺

稱念寺

覺證寺

覺證寺

善徳寺

善徳寺

岐阜県

善教寺

善教寺

滋賀県

蓮華寺

蓮華寺

愛知県第九組

西蓮寺

西蓮寺

貞印寺

貞印寺

妙源寺

妙源寺

宝乗寺

宝乗寺

松林寺(豊田)

松林寺

松林寺(名古屋)

松林寺

静岡県

光福寺

光福寺

神奈川県

空乗寺

空乗寺

専福寺

専福寺

成就院

成就院

常専寺

常専寺

甚行寺

甚行寺

東京都

東京神奈川組

東京神奈川組坊守会

宗門のお知らせ

流泉寺	京都府	住職	役員一同
安立寺	京都府	住職	
常樂寺	京都府	住職	
龍源寺	京都府	住職	
大仙寺	京都府		
東光寺	京都府		
大阪府			
光善寺	大阪府	住職	
正覚寺	大阪府		
聖賢寺	大阪府		
浄福寺	大阪府		
善友寺	大阪府		
大乘寺	大阪府		
和歌山県			
崇賢寺	和歌山県		
新瀉県			
新瀉組一同	新瀉県		
西願寺	新瀉県		
延命寺	新瀉県	住職	

福島県			
南泉寺	福島県		
自源寺	福島県		
泰澄寺	福島県		
長崎県			
專光寺	長崎県		
福井県第一組			
本流院	福井県第一組		
常樂寺	福井県第一組		
松樹院	福井県第一組		
鳳生寺	福井県第一組		
圓光寺	福井県第一組		
願教寺(浜地)	福井県第一組		
要願寺	福井県第一組		
勝願寺	福井県第一組		
顯正寺	福井県第一組		
願教寺(北瀨)	福井県第一組		
安養院	福井県第一組		
西光寺	福井県第一組		
勝光寺	福井県第一組		

宗門のお知らせ

法圓寺	法圓寺
遠成寺	遠成寺
信行寺	信行寺
寶林寺	寶林寺
福井県第二組	
仙福寺(福井)	仙福寺
慈照寺	慈照寺
勝鬘寺	勝鬘寺
願生寺	願生寺
珠光寺	珠光寺
勝林寺	勝林寺
大願寺	大願寺
稱名寺(黒目)	稱名寺
寶幢寺	寶幢寺
勝久寺	勝久寺
教林寺	教林寺
法光寺	法光寺
浄善寺	浄善寺
正行寺	正行寺
西方寺	西方寺

稱名寺(折立)	稱名寺	勝見支院
西生寺	西生寺	
聖徳寺	聖徳寺	
光照寺(味見)	光照寺	
専福寺(大野)	専福寺	
真浄寺	真浄寺	
榮照寺	榮照寺	
北海道		
北海道組		
北海道組坊守会		
北海道組青年会		
浄暁寺	浄暁寺	坊守 婦人会
長正寺	長正寺	住職
高山寺	高山寺	
専覚寺	専覚寺	
専誠寺	専誠寺	住職 坊守
願誠寺		住職 檀信徒一同 婦人会
眞宗寺		住職
弘専寺	弘専寺	
誠満寺	誠満寺	

宗門のお知らせ

真高寺 真高寺

莊嚴寺 住職 檀信徒一同

浄光寺 浄光寺 住職 檀信徒会一同

聖賢寺 住職 坊守 仏教婦人会

願勝寺 住職 婦人会

有志団体

北長太婦人会 (宣隆寺・高山寺・三誓寺)

高朋会

講社

御飯講

賽銭講

開明社

七里講

用度講

御廟講

納所講

高田学苑

高田学苑学苑長

高田短期大学学長

高田中高等学校校長

仏教教育研究センター長

高田福祉事業協会

高田慈光院院長

高田光寿園園長

高田保育園園長

高田真善会

報徳園

高田幼稚園

高田幼稚園

仏教保育協会

三重県仏教保育協会

高田派仏教保育協会

社会福祉法人 けやき福祉会

けやき苑

【ご芳名表記について】

・寺院番号順を基本に掲載しております。

・御寺院からの御香儀は寺院名にて、その他の御

香儀は尊称にて掲載しております。

・表記は御香儀の表書きにあわせて掲載しております。

ます。

## 第九十六回 仏教文化講座報告

本年も大変暑い中、法主殿・法嗣殿のご臨席を仰ぎ、多くの聴講の皆様を迎えて、第九十六回 仏教文化講座が開催された。

講師の先生方と講題、講義の概要は次のとおりであった。

八月一日

## 法主殿御親講

「宇都宮氏の成立と展開」

御親講によりますと、宇都宮氏とは栃木県の県庁所在地である宇都宮市の宇都宮社の神官を代々務めた、東国の有力氏族であり、元々は京都の武家であったが、源氏の奥州平定に際し、東国に進出し、源頼朝の配下に入り有力御家人として多大な働きをなした有力氏族であります。その宇都宮氏一族の初代、二代のご紹介があり、三代宇都宮朝綱については吾妻鏡にその名が十九例も現れ、

五代頼綱はその吾妻鏡に十六例の記述があり、そのそれぞれの記述内容について詳しくご説明いただいた。

先に述べられたように宇都宮氏は、安堵された宇都宮の祭祀を担う神官としての立場のみならず、安堵された地頭職などを抛り所として、宇都宮の神域を支配する領主としての一面をも併せ持ち、將軍家に奉仕する御家人としての立場を明確にし、東国の名族として揺るぎない地位を確立した。

仏教との関わりにおいては、五代頼綱や七代景綱の行実が紹介され、歴代当主がその作善、例えば東大寺大仏の脇侍の造立事業や灯油田の寄進などの作善をすることを尊重し継承してきたが、このような作善が宇都宮家一族の大きな誇りであったに違いない、と法主殿は述べられ、五代頼綱が法然に拝謁して「一向専修の行者」になったとの記載もあり、出家した五代頼綱と弟の朝業は、師の法然の遺骸を守る行動をとったことも紹介された。



この五代頼綱と親鸞聖人とは全く同世代の人であります。両者の直接的な交流は史料上からは確認できないものの、宇都宮一族の関係者の関与が想定され、頼綱が直接親鸞聖人を関東へ招請したわけではなかったにしても、宇都宮一族の広汎かつ全面的な協力体制なくしては親鸞聖人の関東移住・定住は実現不可能であることは疑いようがありません、と述べられました。

さらに、第十六代正綱による下野の専修寺外護が史料上から明瞭に確認され、現在の専修寺にいたるまで、専修寺の存亡の危機を救っていただいた宇都宮氏の恩徳を心に刻んでおきたいものである、と結ばれた。

八月二日

大谷大学教授

三木 彰円 先生

「『教行信証』の願い」

三木先生からは、親鸞聖人の『教行証文類』は、浄土真宗を明らかにされたご書物であるが、どのようなお心でお書きになられたのか、ということ

をお話しいただいた。

『教行証文類』には「真宗興隆の大祖源空法師」と述べられているように、法然上人の選択本願念仏集のみ教えによって、凡夫が凡夫の身のままに浄土に生まれていく、仏になっていく道、つまり称名念仏がなぜ往生の道になるのかを法然上人から学ばれた。それは、仏教全体を引き受ける形で、ここに真の仏道があるということを親鸞聖人がお示しくくださったのであった。

三木先生は真宗聖典の見直し作業をすすめられる中で、親鸞聖人のさまざまなお書き物と向き合われる中で、明らかとなってきた聖人のお心を話された。聖人は、ご自身の書かれたものに何度も手直しをされているが、それは浄土を真宗とする道をお話していただく、現在進行形であります。つまりお念仏の道を見失わないためにはどのような言い方をすれば、見失わないでおられるのか。親鸞聖人が繰り返し手直しをされたのは、真実がはっきりしているからこそ手直しができるのであり、教えが明らかとなるように手を

加えていかれた、と三木先生は話された。

親鸞聖人は八十を過ぎられてからのお書き物が多いのですが、それはお念仏の教えにみんなが出遇って欲しい、浄土真宗の仏道に出遇って欲しいという呼びかけであり、その呼びかけに私たちが出遇って行く、その呼びかけを聞くことが大切であり、そして三木先生は「浄土真宗って何ですか」と話されて、実際に水を飲んでのどの渇きが癒やされるように、この私が真実をよりどころとして生きることが大切であると言われた。

八月三日

元同朋大学特任教授

蒲池 勢至 先生

「現代葬儀と真宗門徒の生死観

―亡き人のゆくえ―

蒲池先生はスライド、数多くの写真を使って、葬儀の変化を分かり易くお示しいただき、葬送儀礼の文化がセレモニー、つまり式典となって、儀礼の文化が失われていることをご指摘いただいた。そして「法縁を開く」という葬送儀礼こそ

が重要であると語られた。

つまり真宗門徒として、亡くなった人はどこへゆくのか、また生きている者は、どう亡き人と出遇うことができるのか、を考えなければならぬと言われた。

そしてご自身の、奥様の介護と死について語られ、それは「手のかかる者ほど、いとおしく」亡くなった妻を自分の中に抱え、妻を現世にとどめてしまおう。その抱え込んでいる妻を解き放つとはどういうことか、妻が往ったお浄土の世界、苦しみが解き放たれた世界とはいかなる世界か。もう一度声が聞きたい、もう一度会いたいと思っていた私に、南無阿弥陀仏の声の中に妻と出遇っていきける、そして、待っていてくれると蒲池先生は言われ、さらに妻の死後、お経の読み方が変わった、お経が泣いていて下さる、とも言われた。

最後に、ビデオでおわら風の盆法要の様子を紹介されたが、この法要の主旨は、法要が営まれる聞名寺のご住職が語られているように、南無阿弥陀仏に亡き人と出遇う、そういうご法縁を開く法

要である、ということを教えていただいた。

八月四日

仏教伝道協会会長 東京大学名誉教授

木村 清孝 先生

「安穩の世に向かう道」

まず木村先生は「私の歩み」として、天草で誕生、そして函館で育ち東京で学ばれ、大阪で初専任となり、その後ハワイへの留学、そして東京大学に務めることになるなどの人生を語られ、まさに「一処不住」「隨縁在住」であると言われた。そして次に「今の社会は安穩か」として、経済格差の拡大、ジェンダー差別、地球環境の異変など、現代社会の状況と分析、そして問題点が語られた。

後半では、まず木村先生ご自身の仏教との関わり、倫理学から仏教学、そして華嚴思想を専門分野とされたことを話された上で「安穩の世に至る道」として、親鸞聖人の場合、道元禪師の場合、日蓮上人の場合を取り上げられた。結論的には

どの祖師も、自分だけのことではなく、国を思い、社会全体とのつながりを考えておられると話されたが、道元禪師を紹介される中で、道元禪師は仏法をひろめていこうとされたが挫折もあった。

しかし外護者の力添えもあって永平寺ができ、一人でも二人でも、真実の仏法者を育てようとして五十四歳で亡くなられていると話されたが、この外護者のお言葉から、今回の仏教文化講座初日でご親講をいただいた法主殿の宇都宮氏と高田門徒との関係を思い起こさせていただいた。

木村先生は最後に「今、求められるもの」として、正しい教えと正しいご信心の大切さを再確認するとともに、縁起的自己を確認することがいかに重要性であるかを説かれ、社会性の弱さを認識し克服するためには、重層的な環境（社会・自然・宇宙）の実相を学ぶことが必要であり、それを木村先生は「共に成す」「共に成る」の「共成」の実現に向かうことが、安穩の世に向かう道ではないかと提言された。

八月五日

高田短期大学名誉教授 誓元寺住職

栗原 廣海 先生

「親鸞聖人の回向論」

まず真宗の特色として、他力の仏教ではなく、他力回向の仏教であることを述べられ『教行証文類』「教文類一」の冒頭文にもあるように、回向が親鸞聖人の念仏思想の核心であると語られた。その視点はすでに末木文美土氏や梅原猛氏によって注視されていることも紹介された。

栗原先生は最初に「回向とは何か」について、仏教辞典による回向の説明、初期経典に説かれる回向の説明があり、梶山雄一氏の「小乗のなかに芽生えた廻向の思想が大乗仏教を生んだ、と言うべきか」の言葉が紹介された。そして大乗の経論に説かれる回向として、『無量寿経』の第二十願文と第十八願成就文の回向についての説明があった。

次に、七高僧に説かれる回向について、天親（世親）菩薩、曇鸞大師、道綽禪師、善導大師、源信

和尚、源空（法然）上人の各書物で使われる回向の内容について吟味された。

そして、親鸞聖人における回向については『教行証文類』の「教文類一」「行文類二」「信文類三」の順で、聖人が語られる回向を概観され、特に『浄土論註』より引文された部分には親鸞聖人独自の訓読が見られるので、そこに栗原先生は注目された。

『教行証文類』の「証文類四」では「往相回向」論を結ぶ文があり「還相回向」論へと移ることが紹介され、さらに『浄土論註』より引文の第二十願（還相回向の願）にある「普賢の徳を修習せん」の言葉に着目して、『浄土和讃』の「普賢の徳に帰してこそ」「浄土高僧和讃」の「普賢の振り舞い」（左訓）の深意を解説された。

また菩薩の還相のすがたについて『証文類』には『浄土論註』よりの引文より二種法身が説かれており、聖人は『唯信鈔文意』でその二種法身および応化身を説明しておられるが、聖人はその還相理解の上で『浄土和讃』や『浄土高僧和讃』に、

釈迦牟尼仏、善導和尚、源信和尚、本師源空が還相の姿として示されていると指摘され、私にとつて親鸞聖人はまさに還相された方であると述べられた。その上でさらに栗原先生は、先の『浄土論註』よりの引文が聖人ご自身の訓読で書かれている点と『浄土論註』原文の意味内容に如來の回向が説かれている点によって、私たちを導き続ける「往相還相二回向」の循環構造を指摘された。

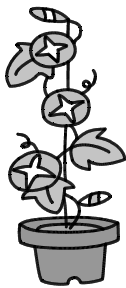
最後に栗原先生は、佐藤弘夫氏の「親鸞と聖徳太子」を紹介された。佐藤氏によると、近代真宗教学では聖徳太子への言及がほとんどなく、諸天や神などと同様に切り捨てられたが、聖人は聖徳太子を敬愛し、日本の神々を念仏行者の守護者と位置付けたと述べられていて、この言及にも栗原先生は還相回向の視点を向けられ、今後は死の問題をどう扱うか、輪廻の問題をどう考えるか、その点を深めていきたいと述べられた。

本年もそれぞれ異なった分野の先生方をお招きして、例年にもまして広い視野からのお話しを伺

うことができた。

この五日間をご縁として、仏教や真宗に関して新たな視点を得させていただくとともに、自らの今後の歩みに様々な示唆を与えていただいたことに深く感謝して、今年の仏教文化講座を閉講とさせていただきます。

(仏教文化講座主監 松山 智道)



第二十八回 法話発表会

開催日時 九月八日(木)

午前十時より開会式

会場 宗務院二階第一会議室

法話発表会を開催します。僧侶になったばかりの方や、日頃法話をする機会のない若手を中心に法話をして頂きます。

これから布教者として歩まれる方を応援する行事です。

※感染症対策のため、本年の聴講は寺族のみとさせていただきます。聴講希望の方は事前に宗務院までお申し込み下さい。

(TEL)〇五九―二三二―四一七一

第四十五回

住職補任研修会実施のお知らせ

標記の件につきまして、住職・住職代務者・副住職規程(宗規第十七号)により、住職補任研修を受講することが、住職及び副住職補任申請の必須条件です。

住職及び副住職を拜命予定の皆様は、早めに受講いただきますようご案内いたします。

なお、教師資格を取得された方が対象となります。

研修予定日

令和四年

十月八日(土) 十二時頃～(泊)

九日(日) 〓十二時十五分頃、解散予定

研修内容

- ・ 真宗教義と高田派の歴史
- ・ 住職道、布教道
- ・ 宗教法人法
- ・ 寺院規則

## 宗門のお知らせ

- ・ 声明
- ・ 現状と課題
- ・ 法式作法

### 申込み方法

指定の申込書を令和四年九月三十日までに  
本山宗務院教学課宛に郵送、FAXにてお申し込  
み下さい。

### 研修費用

二〇,〇〇〇円(当日、ご持参下さい。)

### 定員

二十名(定員になり次第受付終了)

詳細は宗務院教学課までお問い合わせ下さい。

〒五一四一〇一一四

三重県津市一身田町二八一九

真宗高田派宗務院教学課 宛

TEL(〇五九一三三二一四一七一)

FAX(〇五九一三三二一四一四)

## 教学院公開講座

令和四年度 第一回

### 布教伝道研修講座案内学

テーマ 「真の知識に遇うこと」

日時 令和四年十月七日(金)

午後一時 受付

午後一時半 開会式

午後三時半 閉会式

講師 荒山 淳 師

大谷派名古屋教区教化センター主幹

会場 高田会館ホール

聴講の申し込みは八十人までとさせていただきます。  
す。

(感染症対策のため、事前申し込みが必要です)

申し込み方法

聴講を希望される方は教学院へ電話でお申込みください。

申込期日 九月三十日（金）

受付は先着順で行います。定員を超えた方のみご連絡させていただきます。

申込先 TEL ○五九一三二六八三〇八八

\* 平日、午前中（九時から十一時）にご連絡ください

コロナウイルス感染防止のため、開催が急遽変更、中止となる場合がございます。

なお、最新の情報につきましては高田本山HPでご確認ください。

主催…真宗高田派教学院第三部会

令和四年度 第二十七回

教学院研究発表大会案内

教学院研究発表大会を次のように開催いたします。

日時 令和四年十月三十一日（月）

午前十時より午後十二時頃まで

場所 高田会館ホール

日程

午前十時

開会式

発表者

第一部会 中川結幾 研究員

第二部会 藤澤眞純 研究員

第三部会 高島光憲 研究員

第四部会 新光晴 研究員



宗門のお知らせ

午前十時十五分から

発表(一人二十分 質疑応答 五分)

正午ごろ

発表終わり

令和四年度 特別講演 案内

日時 令和四年十月三十一日(月)

午後一時半より午後三時まで

場所 高田会館ホール

講師 真宗高田派本山専修寺宝物館館長

大野 照文 氏

本山行事予定

(九月・十月)

九月八日 第二十八回法話発表会

九月二十日

二十六日 讚佛会

十月一日～三日 資堂講法会

十月七日 教学院公開講座

十月八、九日 第四十五回住職補任研修会

十月三十一日 第二十七回教学院研究発表大会

## 下付金のお知らせ

平成二十八年度分院号下付金、及び納骨壇加入下付金を専修寺正味財産に計上いたしました。

(令和四年五月三十一日付)

院号冥加金、及び納骨壇加入冥加金の下付金は納入された年度から、五年を経過したものは、専修寺正味財産に計上されるため、交付出来ませんのでご注意ください。

詳しくは宗務院財務課までお尋ね下さい。



真宗高田派共済会のご案内

● 全寺院対象の共済制度 ●

真宗高田派共済会運営規程による給付金制度

○災害見舞金制度

- ・ 本堂全焼及び全壊 100万円
  - ・ 本堂半焼及び半壊 60万円
  - ・ 庫裏全焼及び全壊 60万円
- ※災害を証明する書類等が必要です

○祝金制度

- ・ 本堂新築及び改築 60万円
  - ・ 本堂を除く境内建物の新築及び改築 10万円
- ※高田派代表役員の新築・改築承認書と工事契約書の写しが必要です。尚、工事費が壱千万円以上の場合となります。

○住職死亡の場合

在任期間により給付金が異なります

- ・ 住職在任 40年以上 50万円
- ・ 住職在任 30年以上40年未満 40万円
- ・ 住職在任 20年以上30年未満 30万円
- ・ 住職在任 10年以上20年未満 20万円
- ・ 住職在任 10年未満 10万円

○住職退職の場合

上記死亡の場合を適用する

給付及び申請のお問い合わせは、下記の共済会担当までお尋ねください。

〒514-0114

三重県津市一身田町2819番地

真宗高田派宗務院内

真宗高田派共済会

電話 059-232-4171

F A X 059-232-1414

## 人権擁護啓発活動重点項目

- 一、国際時代にふさわしい人権意識を育てよう。
- 一、子どもの人権を守ろう。
- 一、高齢者の人権を尊重しよう。
- 一、病気・部落などによる差別をなくそう。
- 一、障害者の完全参加と平等を実現しよう。

「三重県人権教育基本方針」より抜粋

令和四年八月二十日印刷  
令和四年八月二十日発行

三重県津市一身田町二八一九番地  
電話（〇五九）二三三―四一七一  
<http://www.senjui.or.jp>

真宗高田派本山専修寺

発行所 宗務院

振替〇〇二五〇―〇一五一九四番

三重県津市一身田町七六五番地  
印刷所 相和印刷所

電話（〇五九）二三三―二〇七〇